

# 被災地における励まし活動の実態把握—いわき市の地域紙を用いて—

## Investigation into *Hagemashi*-activity in an Affected Area by the Survey of Local Newspaper Articles in Iwaki City

門倉 慧<sup>1</sup>, 梅本 通孝<sup>2</sup>

Satoshi KADOKURA<sup>1</sup> and Michitaka UMEMOTO<sup>2</sup>

<sup>1</sup>筑波大学 理工情報生命学術院 システム情報工学研究群 リスク・レジリエンス工学学位プログラム  
博士前期課程

Master's Program in Risk and Resilience Engineering, Graduate School of Science and Technology Degree  
Programs in Systems and Information Engineering, University of Tsukuba

<sup>2</sup>筑波大学 システム情報系

Faculty of Engineering, Information and Systems, University of Tsukuba

In the affected areas, activities to encourage the victims such as performances and talks has been done by various groups and persons. Although the importance of these activities ; “*Hagemashi Activities*” has been recognized, actual state of them has not been clarified enough. In order to sort out the tendency of the activities and to grasp the actual state of the activities by a survey of local newspaper articles. Based on obtained data, we categorized and grasped the attributes of the activities, and grasped the transition and the trend of it. And, we grasped four trends classified by the genre of it, the kinds of victims and the type to get involved with victims.

**Keywords:** *victims' minds, recovery from disasters, encourage the victims, local newspaper, Iwaki city*

### 1. はじめに

#### (1) 研究背景

阪神・淡路大震災以降、ボランティアによる被災者を支援する活動が盛んに行われるようになるとともに、被災者に対する心のケアの重要性も認識されるようになり、精神的な面での支援を目的としたボランティア活動も行われている。

そのような精神的な面での支援の一例として、被災地内外から被災者を訪れ、公演や体験教室、語りかけなどといった文化や芸術、スポーツに関する活動が行われている。これらは必要最低限の生活を送る上では必ずしも必要とされないが、被災者の励ましを目的に行われる支援活動である。実例として、避難所にてバレエ教室の生徒による演技を鑑賞した被災者からは「元気をもらった」<sup>1)</sup>という声が、同じく避難所にて開かれた演芸会に参加した被災者からは「気持ちがなごみました」<sup>2)</sup>などの声が聞かれており、このような活動は、被災者の精神的な復興においてある一定の効果があると考えられる。

また、東日本大震災後の政策として、被災地の子どもたちに対する心のケアや安心して健やかな生活を送ることができる環境の醸成を目的とした文化や芸術、スポーツ活動への支援が文部科学省<sup>3)</sup>によって行われている。例えば、アスリートを派遣し子どもたちを励ます「スポーツこころのプロジェクト 笑顔の教室」や、音楽、演劇、落語、伝統芸能、美術の活動を行う芸術家などを派遣す

る「次代を担う子どもの文化芸術体験事業(派遣事業)」などが挙げられる。

#### (2) 関連既往研究

##### a) 心の復興や心理回復過程に関する研究

災害時の心理について、Raphael(1986 石丸訳 1989)<sup>4)</sup>は災害直後から時系列ごとに5つの適応状態の変化が見られることを明らかにした。また、最近では酒井ら(2020)<sup>5)</sup>が長期的な心理回復過程において6つのパターンを明らかにしている。これらの研究は被災後に心理変化が生じること、そしてその心理変化は被災者によって異なることを示している。つまり、精神的な支援に関しては、被災者ごとに必要な内容や時期が異なると言える。

##### b) 精神的な被災者支援ボランティアに関する研究

災害後、医学的な治療や見守りが必要でない一般的な被災者へこころのケアを行うボランティア活動として、内閣府<sup>6)</sup>は足湯や喫茶スペース、サロンなどの傾聴や居場所づくりを通しコミュニティ形成を目的としたボランティア活動を取り上げている。そのうち足湯に関しては、渥美(2008)<sup>7)</sup>によって、被災者の身体に接触しながら被災者の声を聞き取る活動であり、身体の直接的接触による活動であるとされている。

##### c) 芸術・文化及びスポーツ分野の復興支援に関する研究

音楽ジャンルの活動に関しては、中村(2014)<sup>8)</sup>は震災後の人と音楽との関わりの傾向を新聞記事調査から整理し、活動の様子をエスノグラフィックな手法で記述している

のに加え、佐々木ら(2012)<sup>9)</sup>は岩手県における震災後の音楽慰問活動に関して類型化し報告を行っている。また、他の文化・芸術、スポーツ分野についても活動の記録を取りまとめた報告や研究が少数見られた。なお、それらは各分野からの言及に留まっており、被災者支援の観点から活動の特異性や意義へ言及した研究は見受けられなかった。また、活動時期や活動を受ける被災者の属性などに注目した研究も見受けられなかった。

#### d) 新聞記事分析に関する研究

新聞記事分析は目的に合わせて様々な手法が行われてきた。本研究と同じく、行動の実態を新聞記事から代替的に読み取る目的で行った研究として、森ら(2013)<sup>10)</sup>や大野ら(2013)<sup>11)</sup>の研究がある。森ら(2013)は新聞記事分析を行うに当たり、対象記事の見落としを防ぐために全文に目を通すことを重要視している。さらには、森ら(2013)、大野ら(2013)ともに統計分析を行うために記事の基本情報及び分析項目のデータベース化を行っている。

### (3) 研究目的

大規模災害時には、被災地内外から被災者を訪れ、公演や体験教室、語りかけなどといった文化や芸術、スポーツに関する被災者支援活動が行われている。これらは必要最低限の生活を送る上では必需とは言えないが、被災者の励ましを目的に行われる支援活動であり、支援を受けた被災者の声や様子から精神的な復興において効果があると考えられる。以上より、本研究では、被災者支援活動の1つとしてこれらの活動に焦点を当てることとした。すなわち、1(1)にて述べた文部科学省による東日本大震災後の政策対象を援用し、生活必需ではないが被災者の心のケアを目的とした文化・芸術・スポーツ活動を励まし活動として本研究の対象とすることとした。

また、励まし活動を行う人物・団体を「活動者」、活動を楽しむ被災者を「被支援者」、活動の単位を「活動」、活動に含まれる個々の活動も「活動」と呼称する。

先に述べたように、心の復興は生活の復興とともに大変重要であると考えられる。そのような心の復興の一端を担うボランティア活動として、被災地訪問による励まし活動は他のボランティア活動とともに必要不可欠な活動ではないかと考える<sup>1)</sup>。また、心の復興は被災者ごとに異なり、その変化する時期も異なることから、励まし活動も心の復興状況に合わせた内容で行うことが好ましいと考えられる。

そこで本研究では、励まし活動について体系的に整理し、被災者支援として活動の特異性、更には復興や被災者との関係性などの実態を把握することを目的とする。

特に活動の推移や活動ジャンル別の特徴、避難者や子どもを対象とした活動の特徴、交流の多さと被災者の反応の違いなどに注目し、傾向を把握する。得られた活動の傾向は、被災者の心的な復興過程における活動の効果への言及や効果的な活動内容検討の足掛かりとしたい。

本稿の構成は次のとおりである。2.で被災地域に根差した新聞記事を用いた励まし活動の調査方法を示し、3.及び4.では記事から得られた活動の実態について把握する。そして、5.で本稿のまとめ、6.で今後の課題を示す。

## 2. 新聞記事調査

### (1) 調査対象地と手法

本研究では福島県いわき市<sup>12)</sup>を対象地とした。

表1 新聞記事調査の実施概要

調査目的	東日本大震災後1年間にいわき市で行われた励まし活動を扱った新聞記事の収集
対象資料	いわき民報(発行日:2011/3/12~2012/3/11)
対象記事	生活必需ではないが被災者を励ます活動に関する記事
収集記事	638面(関係資料も含む)
活動件数	644件

表2 属性項目の抽出

項目名	抽出方法	抽出数
活動日	同内容の活動で活動日が異なる場合、異なる活動と見なす。	
会場	避難所や避難者向け住居を抽出。 会場の施設を本来の用途別に抽出。	複数選択肢 単数回答
目的	開催目的や活動者のコメントから、活動後の表現を抽出。複数存在する場合は代表となるものを選択。	
活動ジャンル	ジャンルを抽出。	
活動型	提供方法を抽出。	複数選択肢
反応(行動)	被支援者の活動に対する行動を抽出。	複数回答 (最大3)
反応(心情)		
反応(発言)		

いわき市は約9年前の東日本大震災の被災地の一つであり、地震や津波により、死者・行方不明者含め347名、建物被害は約8万棟と甚大な被害を受けている。さらには、福島第一原子力発電所からの距離も近く、半径30から70km圏内に位置している。そのため、地震、津波、原発事故の影響で最大1万9,813人と多くの避難者が避難所に身を寄せた。避難所に関しては、最大、市内127カ所を設置し、162日後には市開設の避難所を閉鎖した。応急仮設住宅や雇用促進住宅などの一時提供住宅の提供は4月16日から行われた。また、いわき市の震災前の人口は約34万人、約13万世帯(2011年3月1日現在)<sup>13)</sup>と県内では人口が最大であり、過去に14市町村が合併したため多くの市街地が存在することから、多くの励まし活動が行われていることが考えられた。

以上の理由からいわき市は本研究の対象地として最適であると判断した。

また、調査手法として新聞記事調査を用いた。当初、調査対象として、避難所などにおいて訪問者の履歴を記録したような資料を考えていた。しかし、いわき市に問い合わせを行ったところ、そのような記録は残っておらず、存在するとしても入手困難であり局地的な情報である可能性が高いとの回答を得た。そこで、他の媒体を検討したところ、震災当時の様子について過去の事例を記録した数少ない媒体であるとともに、地域で行われた活動などの記録が掲載されやすく、閲覧が可能な媒体である地域紙いわき民報を対象にすることとした。いわき民報<sup>14)</sup>はいわき市全域を対象とし、夕刊のみの発行、休刊日は休日と祝日であり、タブロイド判16ページ(水曜日のみ20ページ、震災直後や節目の日にはページ数は異なる)のローカル紙である。他にも地域紙として福島民友と福島民報があるが、対象地域が福島県全域としているためいわき市内の活動に関する記事はいわき民報と比較して大変少なかった。

以上の理由からいわき市及びいわき民報は本研究の対象として最適であると判断した。実施した新聞記事を対象とした調査に関して、実施概要を表1に示す。

ただ、新聞記事の特性上、全ての活動に関する情報を得ることは難しく網羅性を担保できないことや記事の字数制限、各記者の表現の違いによる一つ一つの活動の分析など、新聞記事を対象とした調査には限界がある。

ゆえに本研究では、網羅性や一つ一つの活動の実態に

重点を置かず、新聞記事の長所と短所から検討可能であると考える活動全体の傾向把握を行う。

## (2) 分析概要

分析の手順を以下に示す。

### a) 記事の収集・整理・選択

- ①「励まし活動」を掲載した記事の収集を行う。なお、その際には収集漏れの無いよう、森ら(2013)のように記事全てに目を通すとともに、対象に類似する記事に関しても記録をとる。
- ②収集した記事から対象記事の最終選定を行う。
- ③各記事に対し、新聞記事の日付を用い番号を振る。

なお、励まし活動を含むイベントを1つの活動として捉え収集した。

### b) 属性項目の抽出

活動の属性項目を設定し、抽出を行う。主な項目と抽出方法に関して表2に示す。なお、抽出した項目は森ら(2013)と大野ら(2013)同様、データベース化を行う。

### c) 各項目のカテゴリ化

項目内のカテゴリ化を行う。カテゴリの作成に関しては、同じく活動の整理を行った佐々木ら(2012)を参考に活動内容に加えて、活動会場や目的などを取り入れた。特に活動内容に関しては、ジャンルだけではなく、佐々木らカテゴリを設けていた「鑑賞型」「体験型」を取り入れ、本研究では著名人などに代表される会話のみの活動として「対話型」を追加した。

### d) 1活動への細分化・集約化

記事の内容から1活動に細分化、集約化を行った。本研究では、活動を1単位として見なし、会場及び日時、活動者が異なる活動に関しては全て別の活動として記録した上で、同じ活動に関する記事に関しては表現の統合を行った。

## 3. 励まし活動の実態—単純集計と推移—

本章では活動の効果や効果的な活動内容の検討を見据え、実態把握を行う必要であると考えられる単純集計結果及び活動の推移を示す。

### (1) 各項目の単純集計

単純集計より、いわき市における震災発生後1年間の励まし活動には以下のような傾向が見られた。

#### a) 会場

会場に関しては大きく2種類の観点から分類を行った。会場の内訳について図1、図2に示す。図1は活動と被支援者の復興過程との関係性を明らかにすべく、会場が避難者の居住環境であるかどうかを基準に、図2は活動と平常時の生活空間との関係性を明らかにすべく、平常時の用途を基準に分類した。

平常時用途別の内訳は教育施設の割合が大きく、その理由として、避難所である場合が多いこと、そして後述するが被支援者のうち活動の対象として子どもが多かったことが挙げられる。次いで文化・交流施設、運動施設・公園が多く、その理由として平常時から人々のイベントが行われることの多い場所であることが考えられる。以上より、避難所、子どもが集まる場所、平常時より交流拠点である場所で、活動が多く行われるのではないかと考えられる。

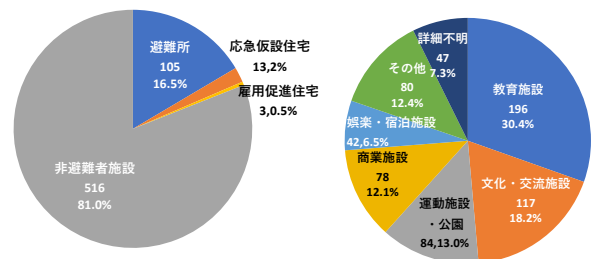


図1 会場(震災時)の内訳 (N=637)

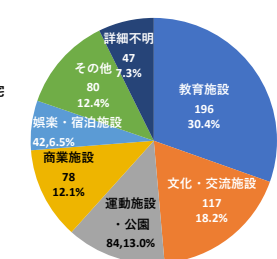


図2 会場(平常時)の内訳 (N=644)

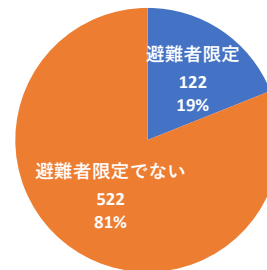


図3 被支援者(避難者)の内訳 (N=644)

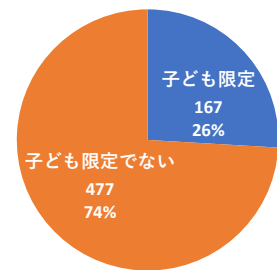


図4 被支援者(子ども)の内訳 (N=644)

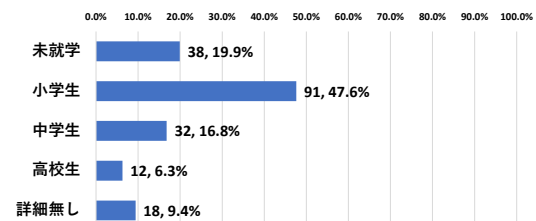


図5 子どもの世代別の割合 (N=644)

### b) 被支援者

特徴的な被支援者に対する活動の傾向を明らかにすることで、被支援者の属性に適した活動内容について議論の参考になりうると考える。被支援者の主要な属性として年代、住環境が考えられるが、今回は平常時より他世代と異なる嗜好があり、記述が多く見受けられた「子ども」を被支援者の年代属性として採用し、「避難者」を住環境の属性として採用した。また、子どもに関しては教育課程別に分類した。図3より子どものみである割合が約1/4と大きな割合を占め、図4より避難者のみである場合が18.9%である。また子どもの内では、小学生を対象とした活動が多く、比較的幼い順に割合が大きくなっていることがわかる。以上より、子どもを対象にした活動が比較的多く、そのなかでも年少を対象に行われる傾向にあるのではないかと考えられる。

### c) 活動目的

活動をどのような目的に対する手段として活用しているかを明らかにすべく、活動者が考える目的と考えられる表現を抽象度などを考慮し、表3のように分類を行った。図6より、気分を高揚させることを目的とした活動が主要であり、負の心境を回復させることや思考を前向きに変化させることというような目的は少ない。

### d) 活動内容

活動内容は活動分野を示す「ジャンル」、活動の提供方法・関わり方を示す「活動型」の大きく2つの観点から分類を行った。なお、活動型の分類に関しては、鑑賞型は鑑賞を主とし被支援者は活動に加わることは少なく交

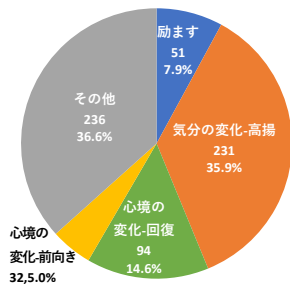


図6 活動目的の内訳 (N=644)

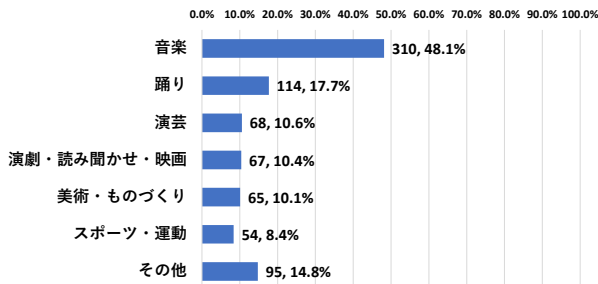


図7 活動に含まれる活動ジャンルの割合 (N=644)

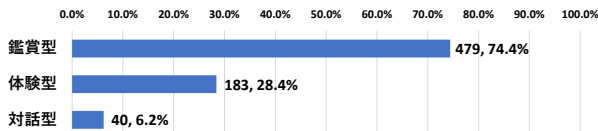
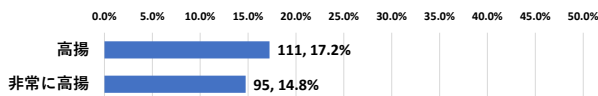
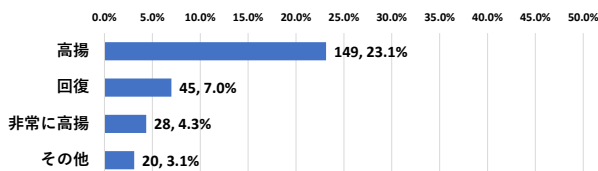


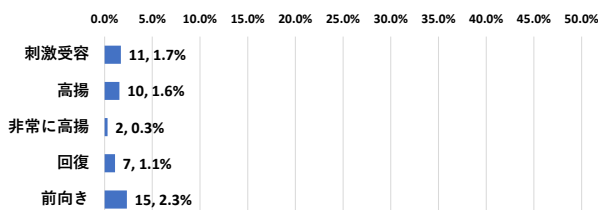
図8 活動に含まれる活動型の割合 (N=644)



a) 反応 (行動) (N=644)



b) 反応 (心情) (N=644)



c) 反応 (発言) (N=644)

図9 表現別の反応の割合 (N=644)

流は少ない活動、体験型は体験を主とし被災者との交流が多い活動、対話型は特定のジャンルに基づくことは少なく被災者との対話を主とする活動という基準を設けた。

まず活動ジャンルに関しては、図7より音楽ジャンルが主要であり、次いで踊りジャンルが多い。これは吹奏楽部の活動が盛んなことや市民音楽祭が毎年行われていることなど<sup>15)</sup>からわかるように元々いわき市では音楽ジャ

表3 カテゴリ-活動目的

カテゴリ	記述の表現例
励ます	励ます, 応援する, 寄り添う, 心の支えになる, 一緒に強く生きる
気分の変化-高揚	笑顔にする, 明るくする, 笑わせる, 楽しませる, 盛り上げる, 元気にする
心境の変化-回復	癒やす, 安心させる, ほっとさせる, 安らぎ, ケアする, 慰める, 心を休める, 日常に戻るきっかけ, 悲しみを乗り越えさせる, ストレス発散させる,
心境の変化-前向き	勇気づける, 前向きにさせる, 希望をもたせる, より元気にする, 新しい一歩を踏み出させる, 一緒に復興を誓う, 復興意識向上
その他	※その他の励ましの表現

表4 カテゴリ-反応 (行動)

カテゴリ	記述の具体例
気分の変化-高揚	拍手, 積極的に参加, 身をゆだねる, ゆったり過ごす, 思い思いに活動, 聞き(見)入る, 夢中になる, 手拍子, ため息もれる, 笑う, 笑顔, 口ずさむ, 満足した表情, リズムを取る, 熱い歓迎, 温かい拍手, 感謝の拍手, 前向きな抱負, 盛り上がる, ハイタッチ, 堂々と披露 等
気分の変化-非常に高揚	踊り出す, 身を乗り出す, 跳び起きる, 声かけ, 大笑い, 写真を撮る, 涙する, 目を輝かせる, いきいき, はしゃぐ, 握手・記念撮影・サインを求める, 大きな拍手, 歓声, 大盛り上がり, アンコール, エールを送る, 総立ち 等

表5 カテゴリ-反応 (心情)

カテゴリ	記述の具体例
気分の変化-高揚	満喫する, 堪能する, 楽しむ, 心躍らす, 魅了される, 心を鷲掴みにされる, 喜ぶ, 心豊か, 心地よさそう, 気持ちよい, 待ちわびる, 嬉しい, 元気, 感謝 等
気分の変化-非常に高揚	余韻に浸る, 静かな感動, 胸が熱い, 感動する, 興奮する, 大喜び 等
心境の変化-回復	癒やされる, 不安・苦勞・辛さを忘れる, 心を楽にする, ストレス発散した, 気分転換になった, 安心する 等
その他	復興を誓う, 自信がつく, 勇気づけられる, 驚く, 納得する, 興味を深める, 地元思いを馳せる, 懐かしむ, 境遇を照らし合わせる 等

表6 カテゴリ-反応 (発言)

カテゴリ	記述の具体例
刺激受容	運動不足が解消, また会おう, 共感してくれる, また見たい, 勉強になった, よかった, 久しぶりだ, 懐かしい, かつこよかった, オーラがあった 等
気分の変化-高揚	楽しかった, 思い出になった, 面白い, 嬉しい, 楽しみにしていた, 幸せだ 等
気分の変化-非常に高揚	夢のよう, 感動した 等
心境の変化-回復	ほっとした, 笑顔になれた, 不安な気持ちを共有できる, 集中し不安を忘れられた, 気持ちが和んだ, 元気をもらった 等
心境の変化-前向き	自分にもできることがある, 命が愛おしい, 宝にする, お守りにする, 宝にする, 憧れが強くなった, 糧にしたい, 教えられたことを懸命に練習する, 頑張る気持ちになった 等

ンルの活動が盛んであること、更にはフラダンスや郷土芸能など踊りジャンルの活動も盛んである土地柄であることが考えられる。以上より、いわき市においては普段からその地域で盛んである活動が励まし活動のジャンルとして多くなったと考えられる。理由としては、被災者が活動者である活動、すなわち被災地内で完結する活動が多い可能性があること、平常時から被災者と活動者との間の関係性が強く、活動者が訪れやすい環境になっていた可能性があることなどが考えられる。いずれにせよ、いわき市においては、平常時から存在する文化・芸術、スポーツに関連した地域資源が励まし活動の盛んさに関係しているのではないかと考えられる。

活動型に関しては、図8より3つの活動型のうち主要な型は鑑賞型であることから、いわき市においては励まし活動の提供方法・関わり方として、パフォーマンスや作

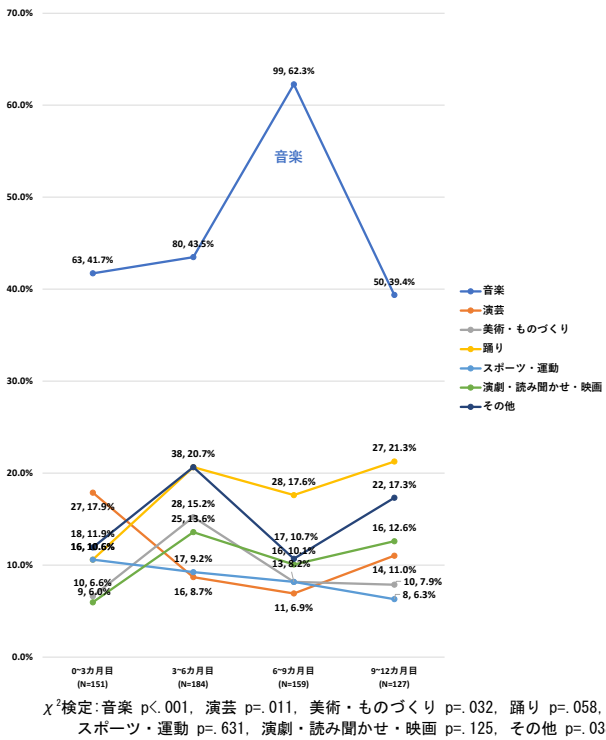


図10 活動ジャンルの推移(割合)

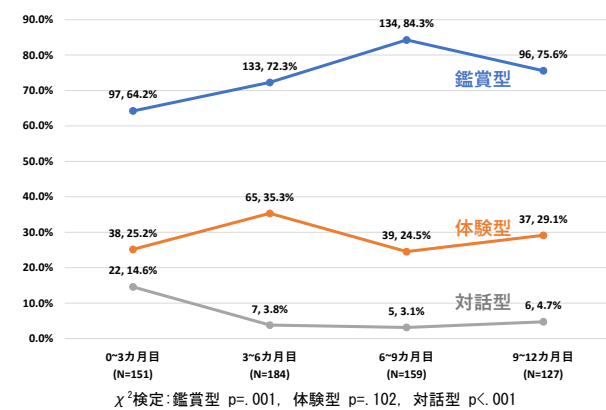


図11 活動型の推移(割合)

品の提供を行い、交流に重きを置かない活動が多いという傾向があると考えられる。

### e) 被支援者の反応

反応は被支援者の行動、心情、発言の3種類の観点から活動の効果を検討すべく表4~6のように分類を行った。各反応の割合について図9に示す。行動や心情表現では高揚を示す反応が大半を占めた。一方、傷ついた心の回復や復興へ前向きにするような表現が比較的少ないが、記述の制限という新聞記事の特性によると考えられる。

## (2) 活動属性の推移

推移に関しては本来であれば可能な限りきめ細かい単位で分析を行うことが望ましいが、分析可能なデータ数の観点から震災発生から3か月ごとの推移を考察の対象とすることが妥当であると考えた。活動件数は、震災直後の0~3か月目は151件と比較的少なく、3~6か月目で184件とピークを迎え、その後は6~9か月目は159件、9~12か月目は127件と減少していた。3~6か月目でピークを迎えた理由として、この時期が夏祭りや追悼イベント、子ども対象の活動などが行われる夏休みであること、復旧が進んだ時期であることが考えられる。以下では、各属

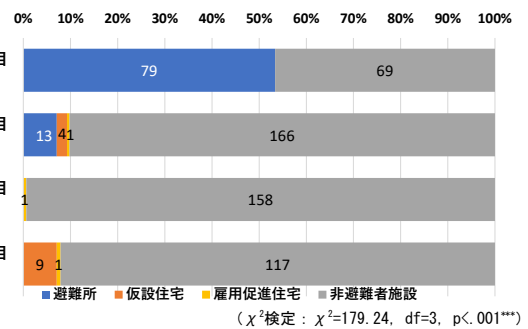


図12 会場(震災時用途別)の推移(割合)

別に活動の推移について述べる。

### a) 推移-活動ジャンル

各活動ジャンルが含まれる活動の割合の推移を図10に示す。音楽ジャンルは他のジャンルと比較して大きな割合を占めており、特に6~9ヶ月目に関しては最も大きな割合を示している。美術・ものづくりジャンルは全体的な活動の傾向と同様であった。演芸ジャンルは災害直後の0~3ヶ月目は多いもののその後は減少している。他のジャンルに関しては、有意差が見られなかった。

音楽ジャンルが6~9ヶ月目に多い理由としては、毎年行われる音楽をテーマとした大きなイベントが複数会場で行われたことが挙げられる。演芸ジャンルが0~3ヶ月目に多い理由として特出したものは見受けられなかったが、活動の受け入れやすさや嗜好の偏りの有無などが影響すると考えられるため、ジャンルごとに比較検討をする必要がある。

### b) 推移-活動型

活動型の変化を図11に示す。どの時期においても鑑賞型が最も多く、対話型が最も少ない。また、3つの活動型はそれぞれで最も高い割合を示す時期が異なっている。なお、体験型は有意差が見られなかった。

対話型は震災直後に多く、避難所で行われる傾向にある。つまり、対話型は震災直後の被災者を対象とし、避難所という居住空間において一人ひとりに対し活動を行う特徴がある。一方、鑑賞型は、避難所が閉鎖され震災から半年以上が経過した時期に行われていることから、復興がある程度進み比較的心理状態が安定してきた被災者を対象とし大人数に対して活動を行う特徴がある。

以上から、復興が進むにつれて活動会場の特性や被災者の心理状態が変化し、それに応じて対象の人数など活動の提供方法が変化すると言えるのではないかと。

### c) 推移-会場

震災時用途別の会場の変化を図12に示す。震災直後の0~3ヶ月では避難所での活動の割合は5割強と多いもの、その後は減少している。

いわき市内の避難所は震災発生約5ヶ月後(162日後)の8月20日までに全ての避難所が閉鎖し、約1ヶ月後の4月16日からは一時提供住宅への入居が進められているため<sup>12)</sup>、そもそも絶対数が減少しており、0~3か月目以降の減少は当然の結果である。また、約3ヶ月後の6月25日には活動のきっかけとして応急仮設住宅の開始が取り上げられており<sup>10)</sup>、実際に9~12か月には避難所・避難者向け住宅での活動が増えていることがわかる。このことから、活動の拠点は被支援者の居住環境によって変化すること、時間的な遅れはあるが被支援者として避難者向け住宅居住者を認識し対象とする活動が行われていることが考えられる。平常時用途別の会場の変化を図13に示す。0~3か月目は、避難所として使用されていた教育施設が約5割

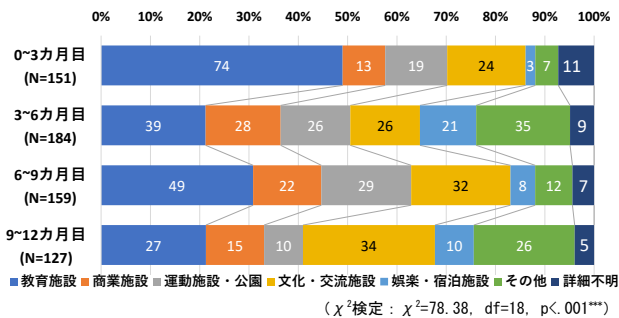


図13 会場(平常時用途別)の推移(割合)

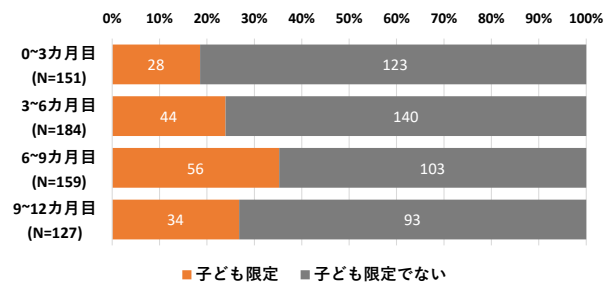


図14 被支援者(子ども限定)の推移(割合)

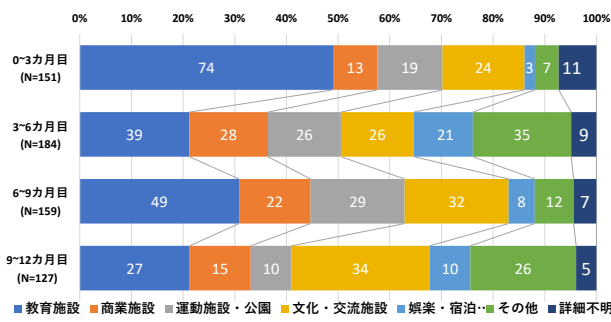


図15 目的の推移(割合)

を占めており、避難者や子どもを対象とした活動が多いことを示している。3~6カ月目は、会場ごとの偏りが小さく、その他の施設が多くなっていることから、多様な施設で行われている。6~9カ月目は教育施設が増加し娯楽・宿泊施設が減少しており、子どもを対象とした活動が増えていることを示している。9~12カ月目は文化・交流施設が最も多く、教育施設と運動施設・公園が減少しており、被支援者は子どものような特徴的な対象が少なくなっていること、運動施設・公園での屋外の祭りなどの活動から文化・交流施設での屋内の活動へ移り替わっていることが考えられる。会場(平常時用途別)の推移からは被支援者の変化や開催方法の変化が読み取れた。

#### d) 推移-被支援者

被支援者を子どもに限定した活動の推移について図14に示す。子どものみを対象とした活動は震災後徐々に増加し、6~9カ月目に最も多く行われている。このことから震災直後は被支援者の対象を被災者全体とし世代に関しての限定は少なかったものの、時間が経過するにつれて被支援者の対象を絞って行くようになったのではないとも考えられる。なお、他の世代についての調査も必要である。被支援者が避難者のみであった場合の推移は会場(震災用途別)と同様であったため割愛する。

#### e) 推移-目的

目的の推移について図15に示す。気分の高揚を目的と

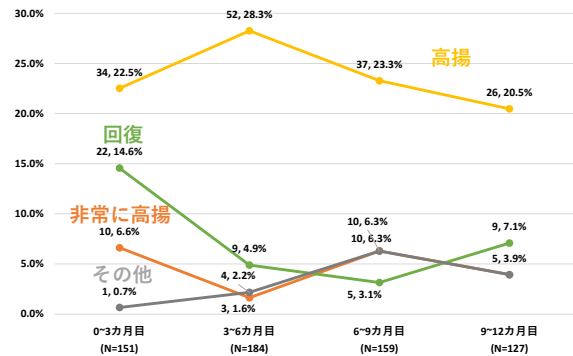


図16 反応(心情)の推移(割合)

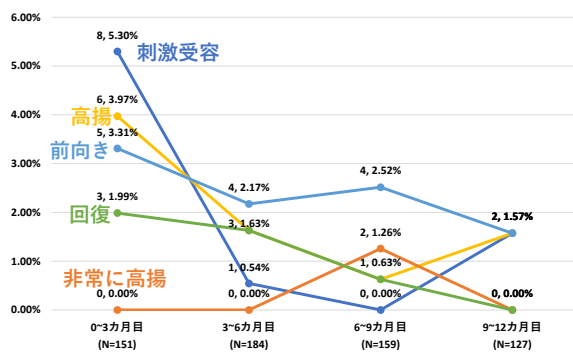


図17 反応(発言)の推移(割合)

する活動は常に大きな割合を占めている。震災直後は心境の回復やとにかく励ますこと、3~6カ月後は心境を前向きにすること、6~9カ月目は気分の高揚を目的とした活動が増加した。また、明確な記述がないその他の目的の活動が震災から時間が経つにつれて増えている。

以上から、気分の高揚をもたらすような活動が主要であり、それぞれの復興過程において問題であると活動者が意識する被災者の状態が変化しており、その変化に応じて活動内容も変化していることが考えられる。

#### f) 推移-反応

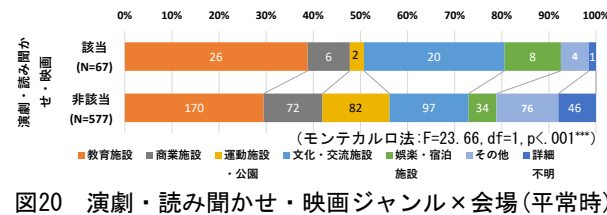
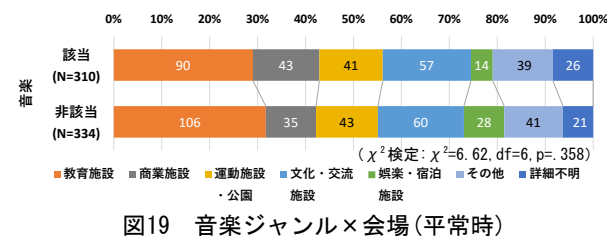
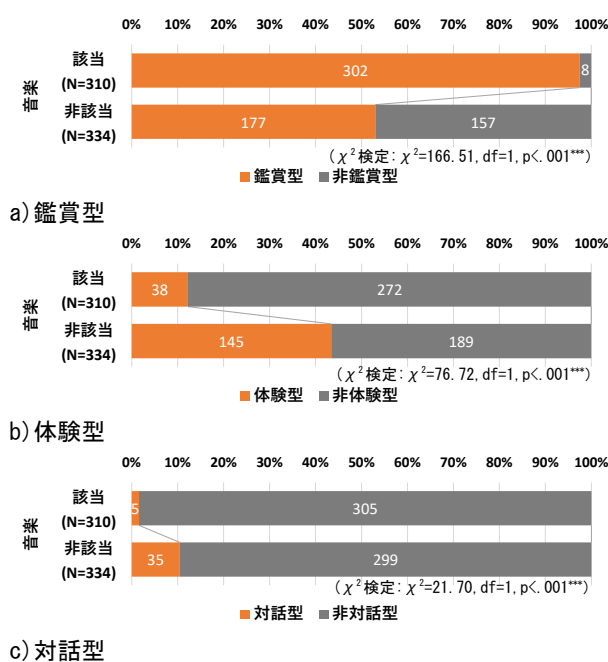
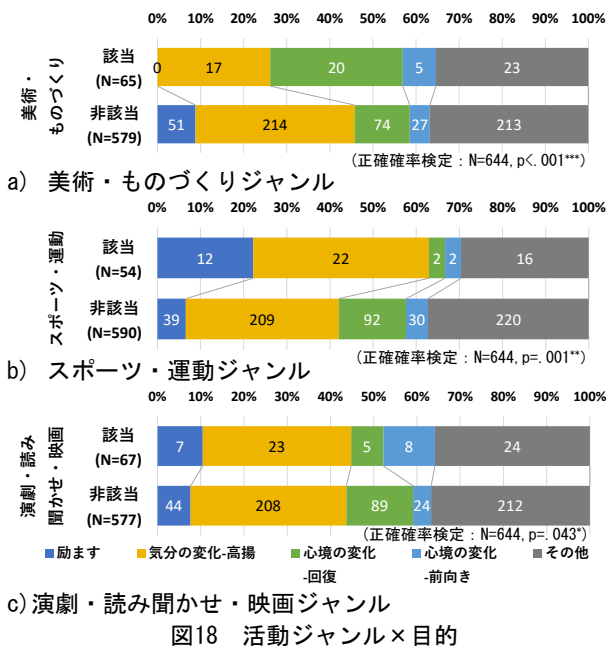
反応(心情)の推移を図16に、反応(発言)の推移を図17に示す。反応は得られた標本が少なく、特に反応(発言)に関しては分析を行うためにより多くの標本が必要である。有意な差が見られたのは反応(心情)-回復、反応(心情)-その他、反応(発言)-刺激受容の3つのみであった。

反応(心情)-回復と反応(発言)-刺激受容のどちらも0~3カ月目で最大の割合を示している。

0~3カ月目において反応(心情)-回復が最大の割合を示した理由としては、目的で心境の変化-回復も同時期に多くなっていること、そして心の回復過程において回復段階にあることがあげられる。また、0~3カ月目において反応(発言)-刺激受容が最大の割合を示した理由としては、震災直後の環境において目新しい励まし活動が行われたからであると考えられる。

以上より、いわき市で1年間に行われた励まし活動として収集した活動について、各属性における主要な傾向や推移が明らかになり、その要因として復興過程や被災者との関係が挙げられた。

次章では、活動ジャンル、被支援者、活動型の3つの属性から活動の傾向について示す。



#### 4. 励まし活動の実態一属性別の傾向分析—

##### (1) ジャンル別の活動の特徴

それぞれのジャンルごとに、目的、会場、活動型との関係を整理した。活動の属性ごとの各ジャンルの特徴を以下に示す。

##### a) ジャンル別の特徴-目的

ジャンル別の目的の特徴について、図18に示す。

まず、美術・ものづくりの活動者は心境の変化を目的に行う傾向があり、漠然と励ますことや気分を高揚させることを目的にすることが少なかったようである。つまり、美術・ものづくりは心境の変化をもたらしやすい、気分を高揚させにくいと考えた活動者が多かったのではないかと考えられる。

スポーツ・運動の活動者は漠然と励ますことを目的に行う傾向があり、心境を回復させることを目的にすることは少なかったようである。つまり、スポーツ・運動は心境を回復させにくいと考えた活動者が多かったのではないかと考えられる。

演劇・読み聞かせ・映画の活動者は心境の変化のうち前向きにすることを目的に行う傾向があり、心境を回復させることを目的にすることは少なかったようである。つ

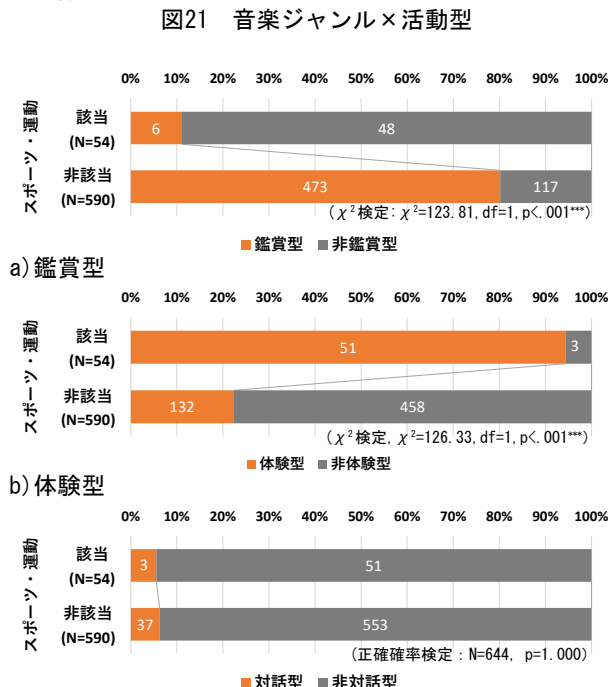


図22 スポーツ・運動ジャンル×活動型

まり、演劇・読み聞かせ・映画は心境を前向きにしやすく、心境を回復させにくいと考えた活動者が多かったのではないかと考えられる。

一方、音楽、演芸、踊りの3つのジャンルに関して有意性が認められなかった。記者の表現に偏りがある可能性があり一般的な傾向とは言いにくい、今回の結果からは活動者は特化した目的を持たない傾向が強いと言え、音楽、演芸、踊りはどの目的にも対応しうると考えた活動者が多かったのではないかと考えられる。

##### b) ジャンル別の特徴-会場

ジャンル別の会場の特徴について、図19, 20に示す。震災時用途別の会場の分類については時期によって割合が大きく異なることから、平常時用途別の会場のみを対象とする。

音楽、演芸の2つのジャンルの活動者は図19のように

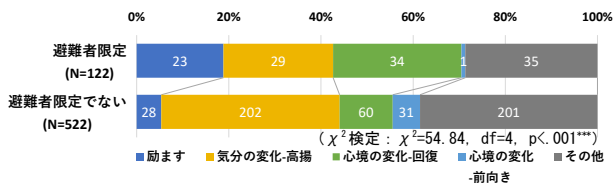
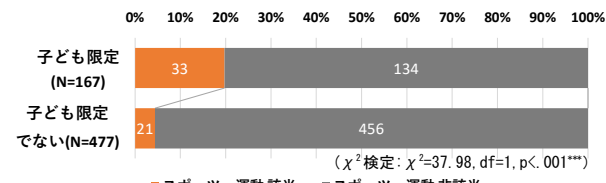
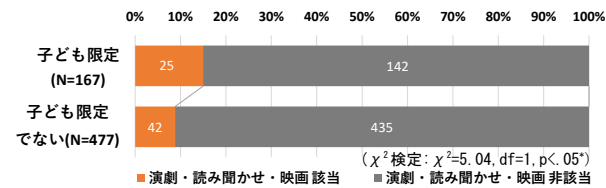


図23 被支援者(避難者) × 目的



a) スポーツ・運動ジャンル



b) 演劇・読み聞かせ・映画ジャンル

図24 被支援者(子ども) × 活動ジャンル

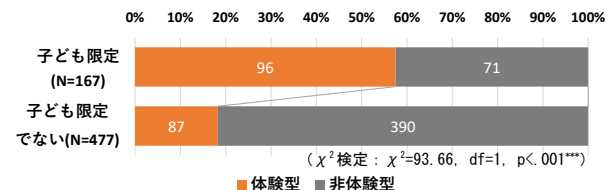


図25 被支援者(子ども) × 体験型

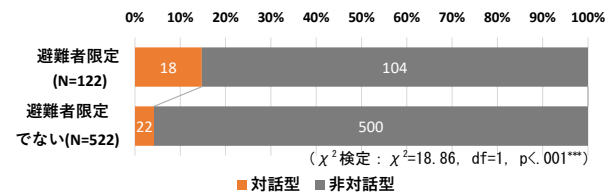


図26 被支援者(避難者) × 対話型

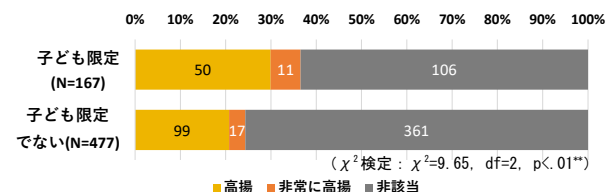


図27 被支援者(子ども) × 反応(心情)-高揚, 非常に高揚

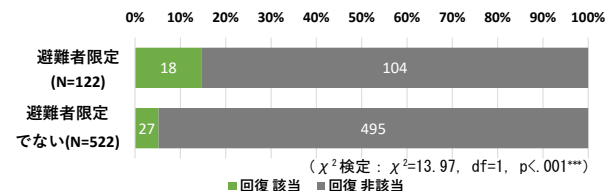


図28 被支援者(避難者) × 反応(心情)-回復

会場の偏り無く活動を行っていたようである。つまり、音楽、演芸はどの被支援者・環境にも対応しようと考えた活動者が多かったのではないかと考えられる。

他のジャンルに関しては図20のように会場に偏りが見られ、被支援者や環境に対して、対応のしやすさが影響

すると考えられる。

### c) ジャンル別の特徴-活動型

ジャンル別の活動型の特徴について、図21,22に示す。音楽、芸能、踊り、演劇・読み聞かせ・映画の3ジャンルの活動者は鑑賞型を用いる傾向があり、美術・ものづくり、スポーツ・運動の2ジャンルは体験型を用いる傾向がある。このことから、ジャンルによって適当な活動の提供方法が異なるのではないかと考えられる。

### (2) 避難者・子どもに対する活動の特徴

特徴的な被支援者である避難者・子どもに注目し、目的、ジャンル、活動型、反応の特徴を整理した。

#### a) 避難者・子どもに対する活動の特徴-目的

避難者を対象とした活動の目的の特徴について、図23に示す。子どもを対象とした活動では目的に特徴が見られず、避難者を対象とした活動では漠然とした励ましや心境の回復が多いという特徴が見られた。その理由としては震災からの経過日数にあるのではないかと考えられる。避難者は震災直後に多いため、震災直後は明確な目的はないものとにかく励ますという目的や、癒やしや慰めなどを通して心の回復を図ることを目的に活動が行われていると考えられる。

以上から、目的は被支援者の属性と言うよりは、震災からの時間経過によって変化すると考えられる。ただ、今回は特徴的な被支援者として子どものみを扱ったため、他の社会的属性に関しても関係を見る必要がある。

#### b) 避難者・子どもに対する活動の特徴-活動ジャンル

子どもを対象とした活動ジャンルの特徴について、図24に示す。活動ジャンルに関しては、避難者を対象とした活動では特徴が見られず、子どもを対象とした活動で体を動かすような活動やものがたりを提供するような活動が多いという特徴がある。考える理由として、震災によって本来行っていたスポーツや遊びが制限されているのを知り、その機会を与えることを目的としたり、遊びの場が制限されたり心の傷を抱えた子どもたちがいることを知り、楽しませたり辛い記憶を忘れさせられる親しみやすい物語に触れさせることを目的としていることが挙げられる。

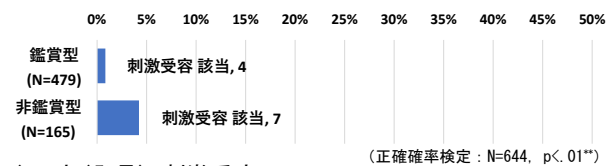
以上から、活動のジャンルの傾向として、被支援者が普段行っているが震災時は制限されている活動が行われやすいと考えられる。

#### c) 避難者・子どもに対する活動の特徴-活動型

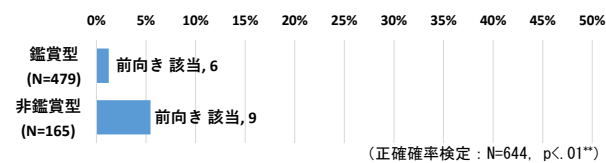
避難者と子どもを対象とした活動ジャンルの特徴について、図25, 26に示す。活動型では子どもと避難者の両方に特徴が現れた。子どもに対しては体験型が比較的多い。その理由として、震災の影響によって遊びの機会が少なくなっていることを考えて実際に体を動かしてもらうことを目的としたこと、一般的に子どもたちの娯楽は普段より鑑賞するというよりは自分自身で何かを行うことにあると考えられる。避難者に対しては対話型が比較的多い。その理由として、対話型のもたらす効果が避難者にふさわしいと考えられていること、震災直後であるため物資支援の付属として対話を行うこと、会場が居住環境であるために時間にとらわれることなく行うことができるなど特に集まる目的がなくても被支援者が集まっている環境で行えることの3点が考えられる。

以上から、活動型の傾向は、被支援者の属性、震災からの経過日数、そして被支援者が集まる空間によって決定されるのではないかと考える。





a) 反応(発言)-刺激受容



b) 反応(発言)-前向き

図29 鑑賞型×反応(発言)

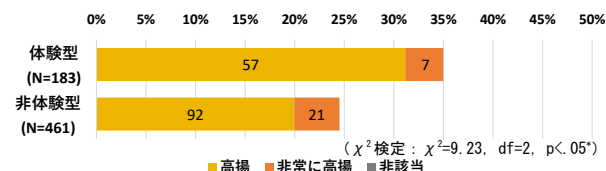
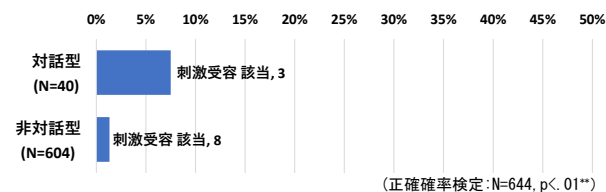
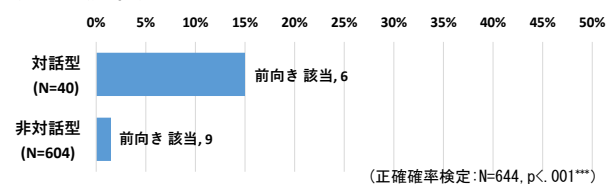


図30 体験型×反応(心情)-高揚, 非常に高揚



a) 反応(発言)-刺激反応



b) 反応(発言)-前向き

図31 対話型×反応(発言)

#### d) 避難者・子どもに対する活動の特徴-反応

避難者と子どもを対象とした活動の反応の特徴について、図27,28に示す。反応では、子どもと避難者の両方に特徴が現れた。子どもを対象とした場合は高揚感を示す反応が多く、理由として一般的に子どもたちは感受性が豊かで感情を外に出しやすいことが挙げられる。避難者を対象とした場合は回復を示す反応が多く、理由として震災直後は精神的にも復旧が進んでいないこと、日常が損なわれた環境にあることが挙げられる。

以上から、反応の傾向は被支援者の属性に加え、復興過程に沿った精神状態によって決定されると考えられる。

### (3) 活動型別の反応の傾向

活動型ごとに反応の傾向を整理した。

#### a) 鑑賞型の反応

鑑賞型の反応について、図29に示す。多くの反応に関して有意差が見られなかったが、刺激受容と前向きの反応は鑑賞型において少ない傾向があることがわかった。つまり、高揚や回復の段階までは影響しても、前向きになるところまでは影響を与えられない傾向にあるとも考えられる。

#### b) 体験型の反応

体験型の反応について、図30に示す。気分の高揚が多

いという傾向が反応(心情)から見られた。つまり、体験型は高揚の反応に対して影響を及ぼしやすい傾向にあると考えられる。

#### c) 対話型の反応

対話型の反応について、図31に示す。多くの反応に関して有意差が見られなかったが、刺激受容と前向きに関しては多い傾向を示した。つまり、対話型は刺激需要と前向きの反応に対して影響を及ぼしやすい傾向にあると考えられる。

#### d) 活動型別の反応のまとめ

まず、明らかになったことはそれぞれの活動型で異なる反応の傾向が見られたことである。各活動型は活動者と被支援者の関わり方が異なり、活動の様子から、対話型と体験型は交流が多く、鑑賞型は少ないと見なせる。つまり、交流方法の違いで心への影響の仕方が異なっていると考えられる。

また、鑑賞型に比べて、体験型や対話型の方が強い反応を示している項目が多い。つまり、交流が少ないとした鑑賞型より、比較的交流が多いとした体験型と対話型の方が強い反応を示しているのではないかと考えられる。

反応を個別的に見ると、刺激受容と前向きの反応の傾向に関しては、交流が多い対話型で多く、交流が少ない鑑賞型が弱くなっている。高揚の反応に関しても交流が多い体験型で反応する傾向が強く、交流が少ない鑑賞型で傾向が弱くなっている。

以上より、活動ジャンル、被支援者、活動型の3つの属性から活動の傾向が明らかになった。各属性ごとの要因には、各属性の持つ本来の特徴と復興過程や被災者との関係が挙げられた。

## 5. 結論

生活必需ではないが被災者の心のケアを目的とした、文化・芸術・スポーツ活動である励まし活動は、復興過程において必要不可欠であると考えられるが、その傾向はこれまで必ずしも明らかにされていない。また、心の復興は被災者ごとに異なり、その変化する時期も異なることから、励まし活動も心の復興状況に合わせた内容で行うことが好ましいと考えられる。そこで本研究では、東日本大震災の被災地の地域紙であるいわき民報を対象とした新聞記事調査及び分析を行い、体系的に活動の傾向を整理し、被災者支援としての活動の特異性、更には復興状態や被災者との関係性などの実態を把握することを目的とした。

本研究における成果・知見を以下に述べる。

- いわき市での主要な活動内容について、まず活動ジャンルは震災前から地域で盛んなジャンルであった。このことから、励まし活動は震災以前から持ち合わせていた地域の文化資源を活かした被災者支援活動である側面も考えられる。活動型では鑑賞型が主要であり、被災者との距離を保ったまま行う数少ない支援活動である側面も考えられる。また、避難所以外の活動が多く、避難所閉鎖後も継続して学校や地域のイベントなどを対象として場所を変えながら長期的に支援が行われていた。目的・反応のどちらも気分の高揚が主要であった。
- 各属性内の推移の様子は異なっており、生活面での復興過程や被支援者の属性に加え、活動の特性にも起因

すると考えられた。特に活動型に関しては、会場の特性や被災者の復興状態に応じて活動の提供方法が変化することが傾向があること明らかになった。ゆえに今後活動の効果などに言及する際には、各活動時期や提供方法の違いを考慮に入れた上で検討する必要がある。

- ジャンルごとに活動の具体的な目的や会場、活動型が異なることが明らかになった。つまり、ジャンルごとに得意とする被支援者や活動の提供方法、環境が異なると考えられる。今回明らかになった活動ジャンルの特徴を参考に、活動の効果や最適な被支援者と活動の組み合わせなどを検討することが可能であると考えられる。
- 被支援者の属性ごとに活動の特徴が現れていた。特に子どもに関しては被支援者が普段行っているが震災時は原発事故により制限されている活動を補う傾向が強かった。つまり、他の支援との相違点として、活動者の嗜好に左右されるという傾向が強い点が上げられる。また、その特徴は属性によってだけでなく、生活の復興状態、被支援者の集まりやすさや活動のしやすさという会場の空間的な性質など、複数の要因によって決まっていると考えられる。
- 交流が少ないと思われる鑑賞型の活動には反応する傾向が弱く見られ、交流が多いと思われる体験型や対話型の活動には反応する傾向が強く見られたことから、交流の多さが反応に影響を与えるのではないかと考えられる。ただ、反応に関しては標本数が少なく、新聞記事調査ゆえに直接的な観察によって得られた結果ではないため、この結果のみで反応と活動型の傾向を判断することは難しい。だが、今回見いだした活動直後の過去の記録に残された言動や行動の表現から反応について抽出し分析する手法は、今後過去の記録から被災者の心情を読み取り、反応の傾向を把握する際に役立つと考えられる。

以上より、他の被災者支援と比較した励まし活動の特異性として、地域のもつ文化資源や、被支援者の集まりやすさや活動のしやすさという会場の空間的な性質などに影響を受けることが挙げられる。更には復興過程や被災者との関係性として、被災者の心理状態の変化に応じて活動の提供方法が変化する点、活動者の嗜好に左右されるという傾向が強い点が挙げられる。

## 6. 今後の課題

### (1) 活動傾向の要因についての調査・分析

今回は活動の傾向を把握することはできたが、その要因や関係性に関しては深い言及が不足している。よって、一つ一つの活動に注目し、様々な観点から調査を行う必要が考えられる。例えば、目的の傾向の裏付けには、活動者の思考や活動に至るきっかけ、経緯などから共通性を見いだすために、活動者や活動関係者へのヒアリング調査が有効的であると考えられる。

### (2) 複数地域での実態把握による傾向の一般化

今回はいわき市という1地域で行われた励まし活動に関して傾向を明らかにした。今後はその傾向が一般的な

傾向であるのかについて検討を行う必要がある。ただ、今回は励まし活動の記録資料として地域紙を用いたが、どの地域にも地域紙があるとは限らない。その点では、データの収集方法に関しても再度検討を行う必要がある。

### (3) 活動の効果についての調査・分析

本研究では、活動の効果は新聞記事上に記載されている一部の被支援者の行動、発言、そして取材を行った記者が読み取った被支援者の心情に関する表現を対象とした。つまり、部分的、間接的かつ主観的な表現であり、客観的なデータとは言えない。よって、活動の効果について論ずるためには、心理学的な知見に基づき活動を受けた被支援者を対象とした質問紙調査や面接法、活動の観察調査などによって明らかになった結果に基づき論じる必要がある。

## 補注

(1)精神的な支援を目的としたボランティア活動には、(2)b)で取り上げた足湯や喫茶スペース、サロンのような活動もあり、活動を通して被災者とコミュニケーションをとることで被災者個人の精神状態及びコミュニティの改善をもたらすという点において、励まし活動と類似しているが、先で示した文化・芸術・スポーツに関連する活動という点において異なっており、励まし活動と区別することとする。

## 謝辞

本研究を進めるに当たりご助言を頂いた筑波大学システム情報系系井川栄一教授に、この場を借りて御礼申し上げます。また、示唆に富むご意見を頂いた査読者に心より感謝いたします。

## 参考文献

- 1) 「平ブルミエールパレエ パレエで被災者に勇気を」、いわき民報, 2011年3月26日, 夕刊, p.1.
- 2) 「アリオスで演芸会開く いわき芸能倶楽部」、いわき民報, 2011年3月28日, 夕刊, p.4.
- 3) 文部科学省：平成23年度文部科学白書, pp.20-21, 2012.
- 4) Raphael, B.: When Disaster Strikes: How Individuals and Communities Cope with Catastrophe, Basic Books, 1986. (石丸正 (訳) : 災害の襲うとき, みすず書房, 1989)
- 5) 酒井明子, 渥美公秀：東日本大震災後の被災者の心理的回復過程—震災後7年間の語りの変化—, 実験社会心理学研究, vol.59, No.2, pp.78-88, 2020.
- 6) 内閣府：被災者のこころのケア 都道府県対応ガイドライン, 2012.3
- 7) 渥美公秀：災害救援における“接触”に関する考察：—新潟県中越沖地震における足湯, 手紙, 寄り添い—, 日本心理学会大会発表論文集, Vol.72, 日本心理学会第72回大会, p.1AM146, 2008.
- 8) 中村美亜：東日本大震災をめぐる「音楽の力」の諸相：未来の文化政策とアートマネジメントのための研究1, 芸術工学研究, No.21, pp.13-29, 2014.
- 9) 佐々木正利, 原田博之, 降矢美彌子, 上田 益：第10回(Blue Valley)大会報告「震災」と音楽表現—被災者に音楽は何かできるのか—, 音楽表現学, vol.10, pp.59-62, 2012.

- 10) 森伸一郎, 鶴久森潤: 新聞記事分析による東北地方太平洋沖地震時の住民の津波避難行動, 土木学会論文集A1 (構造・地震工学), Vol.69, No.4, pp.I\_942-I\_957, 2013.
- 11) 大野沙知子, 高木朗義: 新聞記事を用いた東日本大震災における津波避難行動に関する考察, 土木学会論文集D3 (土木計画学), Vol.69, No.5, pp.I\_75-I\_89, 2013.
- 12) いわき市: 東日本大震災から1年 いわき市の記録, 2012.
- 13) いわき市: 平成22年度現住人口調査結果表
- 14) いわき民報社HP: <http://www.iwaki-minpo.co.jp/corporate-profile/company-overview> (最終閲覧 2020.12.29)
- 15) ニッセイ基礎研究所, いわき芸術文化交流館アリオス: 文化からの復興 市民と震災といわきアリオスと, 水曜社, 2012.
- 16) 「被災者支援 ファミリーコンサート開く」, いわき民報, 2011年8月1日, 夕刊, p.5.

(原稿受付 2020.8.23)

(登載決定 2021.1.9)